

まね木猫通信

No.001
発行元
まね木猫

『三代目木地師』の挑戦



栗きんとんで有名な、岐阜県恵那市の中心部から、明知鉄道で一駅の東野に、木地師の工房があります。そこで木地師をしている、三代目小林哲也は、今日も轆轤を回し、木地師の使う刃物「かんな」で、木の器を仕上げています。

誰にも劣らない腕と言われた祖父、伝統工芸の可能性を追求し続けた父、そんな背中を見て育った、工房三代目の木地師です。漆器の制作が本職ではありますが、時に、古家具を直したり、他企業とコラボしたりと、多岐に渡り挑戦を続けています。父と母が、始めた工房ですが、父の代から、どんな依頼にも耳を傾け、一つ一つの仕事と誠心誠意、向き合い続けています。今は、母と二人で工房を続けています。

「決して商売がうまくいってもいい。むしろ下手かな」そう笑う彼は、三十代後半です。伝統工芸の世界は、高齢化や後継者問題のさなか、この年齢でも若手と言われています。なかなか食べていけず、仕事を両立する芸家も多い中、何とか食べていけるのは、父たちの残してくれた信頼と、見守って下さるお客様や、地域の方のおかげだと彼は言います。父が急逝してから四年、コロナ禍やウッドショックなど、工房に困難が襲い掛かりました。それでも工房が続いているのは、技術に満足せず腕を磨き、まっすぐ正直である、彼自身の力ではないでしょうか。そして、「その時代の人に寄り添う木地師」のあり方を見失わないこと、もちろん塗師の母の存在も大きいでしょう。

「伝統工芸の信念を持ちながら、時代に合ったものづくりをしたい」彼の挑戦は続きます。

ものづくり
小林クロ工芸
小林哲也

まね木猫の由来

じつは「まね木猫」は、小林クロ工芸の商品でした。捨て猫だった「ミーミ」と、猫が苦手だった先代との出会いが、「まね木猫」の生まれるきっかけでした。時代は、バブルがはじけ消費税増税後。急激に落ち込んでいった消費に、限界を感じていた我が工房に、ある日、次女が拾った1匹子猫がやってきました。最初は反対して「名前をつけるな」と言っていた先代も、いつしか「みーみ」と呼びかわいがるようになったのです。そして、ある日捨てられる端材を見て彼にあるひらめきが…。続きはまたいつか紹介したいと思います。



※現在は、販売しておりません。



はちみつと拭き漆のスプーンのお話

「マヌカハニー」を調べてみるとなんと、とても高価な蜂蜜です。マヌカハニーにしかない殺菌成分や昨今の健康志向、コロナ禍の影響で、話題になってきているようです。せっかく購入したのに、質が落ちてしまう可能性があるなんて、びっくりですね。そんなことも知らずに、木のスプーン販売していました。さらに言ってしまうと、木のスプーン持っているのに、金属スプーンで蜂蜜すくってしまいました。

蜂蜜に限らず、お顔が見えないネットショップ運営でも お客様のおかげで、様々な発見があります。

色々なお話を聞いたり、励みになるお言葉をいただけたりして、ありがたい限りです。それを原動力に、また今日もがんばれます。



NET SHOP
当工房運営 普段使いの漆器や木製品を販売中

木と漆とものづくりの店 まね木猫

Creema
ショップページ

Shops
メルカリショップス
商品検索からまね木猫で検索

クリエイター用 オンラインマーケットプレイス